

幼稚園の副事業

倉橋惣三

幼稚園の主たる事業が、其の園児の完き保育にあることは言を俟たない。しかも、餘力あらば、否寧ろ當然の餘力として伴せ行ふべきものと思ふ副事業がある。それは一言にして言へば幼稚園の社會的貢獻である。

今日の我國の狀況に於て。學齡前幼兒の問題に關する知識は極めて貧弱である。貧弱といふよりも、寧ろ皆無といつた方がよい位であるかも知れない。其の間にあつて、獨り此の問題に専門的研究をつとめつゝあるものは幼稚園である。而して幼稚園は此問題に關して、社會に此の研究を頒ち教ふるの責務を有するものといはざるを得ない。

幼稚園は純理論的には、家庭の幼兒教育を基礎として、其の上に建つものである。少くも幼兒の生活に關する諸般の注意の如きは家庭が其の全責

任を有するものであつて、幼稚園の直接の問題でないといつてもよいのである。しかし、今日の事實は此の理論の通りに行はれて居ない。是に於て幼兒の問題が、いつでも幼稚園の方から教へらるゝの事實を有するのである。

かくて、幼兒の生活の諸問題、假令ば服裝の如き、朝夕起居の規律の如く、或は營養の問題の如きに至る迄、幼稚園は其の自己の本來の教育任務を完ふする必要上、之れを研究し、又それ／＼家庭に向つて警告を發せざるを得ない場合が屢々ある。況んや、教育本來の領域に入つて、玩具、繪本の問題より訓育上の方針、方法等に至つては、家庭に向つて忠告し要請し、或は嚴戒するの必要を止むなくせしめらるゝことも稀でない。勿論、或る家庭にあつては、之等の諸點に於て、周到綿

密なる注意の行届けるものがあつて、幼稚園が以て學び、以て戒めらるゝ如きことも無いではないのであるが、事實をして露骨に語らしめれば、我國の社會は特に此の幼兒問題に就て餘りに多くの無知を有して、幼稚園の方から教へなければならぬ場合が實に多いのである。

是に於て、吾人は、幼稚園が此の方面に於ける社會的貢獻を、一層有効に、一層親切に、一層組織的に實行するの必要がありはしないかと思ふのである。先づ一例として幼兒の服裝の問題に就ていふべきか、實になすべきこと、なし得べきことが澤山あるのである。勿論幼兒の服裝の如き、一定の形式を以て律すべきものではないが、現に各幼稚園に於て各幼兒の服裝は、保姆の間におのづから比較研究せられて、よしとし、悪しとする種々の點を心づかれ、見出されて居るのであるからそれを一步進めて、組織的に研究し發表せらるれば、服裝問題上の幾多の注意をまとめらるべき筈

なのである。而して、それを父母會等に於て園兒の各家庭に忠告し相談することは、既に行はれて居ることであるが、吾人は更に之れを社會的貢獻に迄擴張せられんことを希望するのである。但し社會的貢獻といふことになれば、各園の父母の會などに比して、多少大仕掛けたらざるを得ざるべく、又一層周密な研究をも要することゝなるのであるが、之れは、一区内、一市内等の幼稚園の聯合事業としてすれば別段六かしきことでもないと思ふのである。尙ほ具體的にいへば、假令は一区内の保姆相會合して、幼兒服裝について互の經驗を基礎として相研究し、若し必要あらば、それをれの道の専門學者なり、實際家なりに就て意見をまとめ、出來べくんば實物の見本を調製し或は繪に描き、寫真に撮りなどして、之れを巧みなる親切なる方法に陳列し、各園を持ち廻りて、其の附近の父母を案内し、説明するといふ様のことをすれば、其の益甚だ尠くないと思ふのである。勿論

斯くの如き社會教育に屬することは、其の效果、目立ちて急にあらはるゝものではないが、久しきに亙つて絶えず續けて居れば、必ず何等かの結果はあらはるゝものである。

季節々々の玩具研究等に於ても同様のことが出来る。此の副事業をすると否とに拘はらず、幼稚園は、其の自己の研究事項として、絶えず玩具に注意し、或は蒐集し、或は工夫して居る筈である。それを時々各園より集めて、陳列し、説明し、以て世の幼兒生活に貢献することは、更めて業を企てずとも自然に出来る副事業である。しかも其の效果に於ては實に多大なるものがある。

服装、玩具はたゞ一例として擧げた迄である。その他に幾多の有益なる問題があると思ふが、いづれにしても、幼稚園が眞の平生の研究の結果を少しく整理し、少しく手間をかくれば、以て社會的に大いなる貢献が出来るのである。副事業といふからには、主事業の他に、全く別個な事業を企

てるといふのではない。そんなこと迄する必要は勿論ないことであるが、主事業に自然に伴ふ結果で出来ることは、世の爲は勿論、主事業そのものゝ爲にも利すればとて損する事は無い筈である。

さて、今日まで我國の幼稚園に此の種の試みの少しも行はれない所以には、凡そ二つの理由が考へられる。一つは幼稚園保母諸君の教育的眼界の局限せられて居ることである。擔任の組を思ふて全園を思はず。自分の園を思ふて保育界を思はず。幼稚園を思ふて、一般の幼兒問題を思はず、といった風の狭い處のあるのも其の一つの理由である。ものは全體から局部へも、局部から全體へも、兩方の方向を以て進み得るものであつて、場合によつては、一人の幼兒を中心として其の教育精神が起り、次第に擴大して一般幼兒問題といふ如き處迄行くものとも考られるのであるが、又一方には一般幼兒問題に對する精神から幼稚園教育へ、自分の幼稚園へ、自分の組へ、と順次に狭ばめ行く

處に眞の自分の立場も見出すことも出来るのである。いづれにせよ、現在の幼稚園教育者の傾向は自分を全體の中に於て見ることなく、従つて全體に對する興味の少しも起らないとふ弊がある。次に第二の理由として考へられることは、社會教育と學校なり幼稚園なりとが餘りに隔離して考へられて居ることである。學校教育者、幼稚園教育者等が、その主務として學校内、幼稚園内の教育に専念すべきは言を俟たないが、社會教育に少しでも關與してならないといふ理由は少しもない。否同じ一つの教育精神からは、機會ある毎に社會教育へも延びて擴がつてゆく筈である。學校のことは暫く別問題として、幼稚園教育者に於ては、吾人は之れを幼稚園教育者といふ特殊の教育者として見るよりもより廣い意味の幼兒教育者が幼稚園で働いて居るといふ風に考へたい。若し然らば、その廣義の幼兒教育者が、幼稚園の保育室なり遊園なりから、社會的に幼兒問題へ觸れて行つたと

て何の不思議があろう。寧ろ當然の歸趣ともいふべきである。

市の内に、區の内に、村の内に、町の内にある幼稚園が、其の市の、區の、村の、町の、幼兒問題に社會的に貢獻することは、幼兒教育の専門的知識者を以て自ら居る幼稚園の、當然の副事業ではあるまいか。

清水五句

さし蟹足はいあかる清水哉

芭蕉

先馬の沓しめし行く清水哉

猿雖

さら〜と清水に松の古葉哉

長虹

一すくい飲んで物いふ清水かな

百明

八九間苔を見上る清水かな

左明